

革命前と後の改良と革命の位置づけ

「感情の社会主義」や、あるいは商業を本能的にかろんじる、古いロシア的な、なかば旦那風の、なかば百姓風の、家父長的な気分には、支配されないようにしよう。農民とプロレタリアートとの結びつきを強化するためには、荒廃し、疲れはてた国で国民経済をすぐさま活気づかせるためには、工業を高揚するためには、また、たとえば電化のような、もっと広範でもっと遠大な今後の方策を容易にするためには、必要とあれば、ありとあらゆる経済的移行の形態を利用してよいし、また利用できなければならない。

改良と革命の関係は、マルクス主義によって正確にまた正しく規定されている。もっともマルクスは、この関係を一つの側面からしか、すなわち、プロレタリアートが最初の、多少とも永続的な、多少とも長期にわたる勝利——たとえ一国においてではあっても——をおさめる以前の情勢のもとでしか、見るができなかった。このような情勢のもとで、正しい関係の基礎となっていたのは、改良はプロレタリアートの革命的階級闘争の副産物である、ということである。全資本主義世界にとって、この関係はプロレタリアートの革命的戦術の基礎であり、イロハであるが、第二インタナショナルの金次第でうごく指導者たちや第二半インタナショナルのなかば学者ぶった、なかば気どった騎士たちは、このイロハをゆがめて、ぼかしている。たとえ一国においてであれプロレタリアートが勝利したのちには、改良と革命の関係に、なにか新しいものが現れる。原則的にはもとのままだが、しかし形態のうえでは変化が現れる。マルクス自身はこの変化を予見できなかったが、それは、マルクス主義の哲学と政治学とを基盤としてはじめて認識できる。なぜわれわれはブレストの退却を正しく実行できたのか？ なぜなら、われわれは退却するゆりのあるほど、遠くまで前進していたからである。われわれは、1917年10月25日からブレスト講和までの数週間のうちに、実に目まぐるしいほどすばやくソヴェト国家を建設し、革命的な方式によって帝国主義戦争から抜けだし、ブルジョア民主主義革命をなしとげた。だから、一大退却運動（ブレスト講和）をやってもなおわれわれが「息継ぎ」を利用して、コルチャックやデニキンやユデニッチやピルスーツキーやヴラングりにむかって、勝利の前進をするだけの陣地が、十分にのこされていたのである。

プロレタリアートが勝利するまえには、改良は革命的な階級闘争の副産物である。勝利したのちには、改良は（国際的規模ではおなじく「副産物」であるが）、勝利をかちとった国にとっては、最大限に力をふりしぼったあとで、あれやこれやの移行を革命的に遂行するのに力のたりないことが明らかにわかっているばあいには、なおかつ、必要で正当な息継ぎでもある。勝利は、よぎなく退却するばあいにさえ持ちこたえる——物質的にも精神的にも持ちこたえる——にたりる「力のたくわえ」をあたえてくれる。物質的に持ちこたえるというのは、敵がわれわれを徹底的に打ちやぶることができないように、十分な力の優勢をたもつことである。精神的に持ちこたえるというのは、士気沮喪せず、組織をこわさず、事態をまじめに評価しつつ、勇気と精神の堅固さをたもち、はるか後方に退却し、しかも必要な限度で退却し、退却するにしても適当なときに退却をやめ、ふたたび攻勢にうつることができるようにすることである。

われわれは国家資本主義まで退却した。だが、われわれは必要な限度で退却した。いま

は商業の国家的規制へと退却しつつある。だがほどほどに退却しよう。この退却の終りが見え、あまり遠くない将来にこの退却をやめる可能性も見える、という徴候がすでにある。われわれがこの必要な退却を、いっそう自覚して、いっそう一致協力して、いっそう偏見をもたずにやるならば、それだけはやく退却をやめることができるであろうし、その後のわが勝利の前進運動はそれだけ強固で、早く、また広いものとなるであろう。

1921年11月5日

第33巻『現在と社会主義の完全な勝利のちとの金の意義について』P106～107

「プラウダ」第251号、1921年11月6－7日